【予稿集】

モビリティーズの社会学としての「図書館情報資源概論」

小牧龍太
共立女子大学文芸学部
rkomaki@kyoritsu-wu.ac.jp

モビリティーズ・パラダイムは，社会というものがヒトやモノの移動によって動的にかたちづくられていることに着目する社会学のアプローチである．本稿では，このパラダイムの視点から司書課程科目「図書館情報資源概論」の教科書を読むことを試みる．また，そうすることが，情報リテラシーといった図書館情報学が扱う概念の再解釈にどのようにつながっていくかを論じる．

"Introduction to Library Information Resources" as Sociology of Mobilities

Ryuta Komaki*
*Faculty of Arts and Letters, Kyoritsu Women's University

1. はじめに

本稿の一方の主題である「図書館情報資源概論」は，2012 年に「大学で履修すべき図書館に関する科目」が改定・施行されたときに「図書館資料論」から改名されて設定された，いわゆる司書課程における必修科目のひとつである．その内容については，"印刷資料・非印刷資料・電子資料とネットワーク情報資源からなる図書館情報資源について，類型と特質，歴史，生産，流通，選択，収集，保存，図書館業務に必要な情報資源に関する知識等の基本を解説する"[1]ものとされている．

次に，もう一方の主題であるモビリティーズ・パラダイムは，旅行や観光の研究で知られる社会学者ジョン・アーリを中心とする学術サークルが提唱する（比較的）新しい社会学のアプローチである．このアプローチは，後述するように，人間社会におけるさまざまな移動や，人間社会そのものがさまざまな移動の中から立ち現れるさまといったものを動的に捉えようとする試みだが，その根底に「創発（emergence)」という考えかたがある．これは，"システムの構成要素が，要素同士の相互作用を通して，どのように集合的な特性ないしパタン……を「おのずから」発展"させていくのかに目を向けるものである[2](p.49).

「図書館情報資源概論」とアーリの論（の日本語訳）では，「特質」，「特性」と語選択に若干の違いはあるが，いずれも characteristics への興味であることに変わりはない．さらに，意識的／無意識的の差はあるかもしれないが，どちらの「論」も，「モノの characteristics」を認知しようとしているようだという共通点がある．そこで本稿では，「図書館資源概論」の教科書として刊行された図書を収集し，モビリティーズ・パラダイムの視点から読むことを試みる．そのうえで，移動論的転回（モビリティーズ・ターン）を明示的に意識することが，図書館情報学や司書養成課程が扱ういくつかの概念の再解釈につながるのではないかという，その可能性について論じる．

2. モビリティーズ・パラダイム

アーリによれば，移動論的転回は"あらゆる社会実体―単身世帯から大企業まで―が数々の形態から成る現実の運動と潜在的な運動に基づいていることを強調するものである"[2](p.16)．この転回から生まれるモビリティーズ・パラダイムの特徴は多岐に渡るが，本稿の議論に特に深く関係す

るものとして，ここでは以下の3点を取り上げる．

まず,モビリティーズ･パラダイムでは,「社会」というものが,“さまざまな程度の「距離の隔たり」”を越えた“つながり”[2](p.74)と，それを可能にするさまざまな移動によって組織されていると考える．アーリが“歴史を振り返ってみると，社会科学は，地理的な近さのなかで続いてきたコミュニティにあまりにも焦点をあて過ぎてきた”[2](p.75)と述べるように，これはこれまでの社会科学に対する批判でもあり，移動論的転回を言語学的転回や空間論的転回と並ぶ「転回」と呼ぶ所以,モビリティーズ･パラダイムを「パラダイム」と呼ぶ所以ともなっている．

次に，モビリティーズ・パラダイムでは，社会を構成する「つながり」と「移動」を考えるにあたり，ヒトだけでなく，ヒトとモノの両方を考慮する．アーリによれば,“物自体が，距離を越えて旅をしている．さらには，人びとが旅をして複雑なハイブリッドを形成することを可能にする物がある．他の物を動かす物がある．人びとが動かずに済むことになる動く物があれば，人びとととともに動く物もある．……このように諸々の実体が組み合わさることで，社会的な営為が生まれ演じられており，そうした実体は非常に異種混交的である．”[2](p.80).

最後に，モビリティーズ・パラダイムでは,「移動」が自由自在なものであるとは考えない．ヒトとモノ（越えるべき物理的空間や移動を可能にする技術といったものも含む）との相互作用の中からは“構造化された路線(ルートウェイ)”が現れ，“人，物，情報”は，その上を循環する[2](p.82).また,“とくに動きのないプラットホーム(送信機，道路，ガレージ，駅，アンテナ，空港，ドック)”といったものも移動の経験を構造化する[2](p.85).

モビリティーズ･パラダイムでは,“身体による旅”,“物の物理的な動き”,“想像による旅”,“バーチャルな旅”,“通信による旅”という5つの相互に依存し合った「移動」によって，社会が“距離の隔たりを越えて組織され，その輪郭が形成”され，形成し直され続けていると考える[2](p.76).その中で，図書館は，情報が循環する「路線」の一部であり，移動の経験を構造化する「プラットホーム」のひとつであると位置づけられるのではないだろうか．同時に，図書館のコレクションは「それ自体が距離を越えて旅する物」「人びとが動かずに済むことになる動く物」「人びとととともに動く物」などの集合体であり，図書館の「路線」や「プラットホーム」としての特性は，それらと組み合わさることによっても現れてくる．（さらに，図書館の「路線」や「プラットホーム」としての特性が，創発的に，図書館資料のモノとしての特性をかたちづくる.）

3. 「図書館情報資源概論」の教科書を読む

3.1 収集した教科書

本稿で用いる「図書館情報資源概論」の教科書は表 1 の通りである．国立国会図書館サーチ，および CiNii Books を使用して，2024 年 6 月時点で入手可能な最新版を特定し，収集した．

表 1: 収集した教科書

書名（シリーズ名）	出版者[1]	版（発行年）
情報の特性と利用：図書館情報資源概論	創成社（創）	初版（2012 年）
図書館情報資源概論（ベーシック司書講座・図書館の基礎と展望）	学文社（学）	第 1 版（2016 年）
図書館情報資源概論（JLA 図書館情報学テキストシリーズⅢ）	日本図書館協会（JLA）	新訂版（2018 年）
図書館情報資源概論：人を育てる情報資源のとらえかた（講座・図書館情報学）	ミネルヴァ書房（ミ）	初版（2018 年）
図書館情報資源概論	理想社（理）	新訂第 4 版（2018 年）
図書館情報資源概論（現代図書館情報学シリーズ）	樹村房（樹）	改訂（2020 年）
事例で学ぶ図書館情報資源概論（事例で学ぶ図書館）	青弓社（青）	[初版]（2023 年）

1. 括弧内は各教科書の略称として表 2 で使用する。

3.2 所収項目の比較

ここでは，図書館情報資源のモノとしての特性や移動により深い関連があると思われる「情報資源の類型と特質」,「図書の生産と流通」,「学術情報の生産と流通」の 3 つの項目を各教科書が取り扱っているか，取り扱っているとしたら，どのような内容となっているかを比較する．結果は表 2 の通りである.（なお，本稿における比較の目的は各項目の内容が比較的網羅的に所収されているかどうかを知ることであり，以下の表は記述の量の多寡や，その質を示したものではない.）

表 2：所収項目・内容の比較

略称	情報資源の類型と特質	図書の生産流通	学術情報の生産流通
創	・歴史 ・種別概観 （ネットワーク情報資源のみ詳説）	○[1]	（ネットワーク情報資源の解説内で言及）
学	○[2]	○	○[3]
JLA	○	○	人文・社会科学については○
ミ	・歴史 ・デジタル情報資源	・主に流通 （出版は出版社のみ）	・定義 ・図書館での扱い ・図書館の発信者としての役割
理	○ （歴史，図書の構造の解説も手厚い．ネットワーク情報資源別立て）	・主に流通	○ （流通と生産を別立てで詳説）
樹	○	○	○
青	○	・主に流通 （出版は出版社のみ）	・情報資源の紹介のみ

1. この項目における「○」は，生産（出版）と流通を網羅して解説していることを示す.

2. この項目における「○」は，類型と特質の解説において，図書，逐次刊行物，視聴覚資料，マイクロ資料，電子資料，ネットワーク情報資源を網羅していることを示す.

3. この項目における「○」は，学術情報の生産（研究者の研究活動）と流通を網羅して解説していることを示す.

「情報資源の類型と特質」については，各種情報資源の「『書架』におけるふるまい」を解説することで類型と特質の説明としている教科書と，図書の歴史（前史を含む）や図書の形態を解説することで特質の説明としている教科書に大別できるようである．前者が図書館で扱う情報資源を比較的網羅した内容になるのに対し，後者は「図書に至る情報メディアの歴史」と「電子的な情報資源」の解説の組み合わせになっていることが多く，特に後者でマイクロ資料の詳説が飛ばされる傾向にあるように見えることは興味深い.

そのような違いはあるが，この項目についての解説においては，どちらのケースでも「図書館情報資源のモノとしての特性」への言及が見受けられた．たとえば，図書には“記録性”“保存性”“反復性”“復元性”“量産性”“保管性”“軽便性”“経済性”“選択性”があるとする JLA の教科書の記述[3](p,32)や，“[有体物の図書館資料は]‘モノ（物）’であるから，一定の質量をもち，空間をふさぎ，特定の個人が占有利用している間は，他者の利用を排除し，その資料を一定期間独占・占有することになる”[4](p.9)といった説明がそれにあたる．また電子的な情報資源との対比によって図書の特性を解説するもの（樹村房など）もあった.

「図書の生産と流通」に関しては，編集者などによる本の企画や著者による原稿の執筆など，図書に収録される情報の生産の現場から，印刷，流通までを追いかけたものと，出版社から取次を経て書店，消費者や図書館に至る図書の流通経路のみを主に扱うものに分かれるようである．いずれの場合も，流通については，出版社，取次，書店（小売店）のそれぞれの役割や，委託販売制度，再販価格維持制度といった流通，販売の仕組みの説明にとどまり，物理的な実体を持つ情報資源がどのようにして図書館に運ばれるかに言及した教科書は見受けられなかった．ただし，今後，「図書館情報資源概論」の教科書が改訂されたり新規執筆されたりする際には「物流の 2024 年問題」などへの言及は避けられないものになるかもしれず，そうであれば情報資源のモノとしての旅がクロー

ズアップされることになる可能性はあるだろう．

また，「学術情報の生産と流通」に関しても，人文・社会科学と科学技術の各分野における研究者の活動（学術情報の生産の現場）から，研究成果の公表（出版），流通までを追うものと，ネットワーク情報資源の出現による学術情報の流通の変化や，図書館における学術情報の取り扱いについてのみを主に扱うものに分かれるようだ．学術雑誌や電子的な情報資源の（特に図書と比べた際の）移動の速さや，学術がそのような速報性を必要とする理由は所与のものとされていることが多い印象だが，“[学術]雑誌は，いうならば，手紙を束ね同好のサークル内で定期的に互いの近況を知らせ合うという性格のメディアです”[5](p.109)という学術雑誌の誕生に関する説明などは，学術研究が距離の隔たりを越えて営まれる社会活動であることを示唆するものであるかもしれない．

4. 考察／おわりに

上述したように，既刊の「図書館情報資源概論」の教科書には，主に「情報資源の類型と特質」についての解説の中で，「図書館情報資源のモノとしての特性」への興味を示すものが見受けられる。特に図書の「軽便性」（ヒトが携帯することができる）や「保存性」（時間を越えて保存できる），空間をふさぐことについての言及や，マイクロ資料や電子的な情報資源がより少ない空間しかふさがないこと，より容易に移動することに関する分析は，これらの情報資源が持つ移動性（モビリティ）に触れたものであるといえるだろう．一方で，それらは，そのような情報資源が図書館に到着した後の，比較的短い距離の中での移動性を記述したものでしかないかもしれない．また，それらの情報資源が，越えるべき物理的空間や，図書館や図書の出版流通，インターネットといった移動を可能にする技術との関係性の中において獲得した特性の，静的な記録に過ぎないかもしれない．

モビリティーズ・パラダイムでは，移動によって距離の隔たりを越えて組織される社会活動を動的に考察することを試みる．一歩踏み込んで，より長い「距離の隔たり」を考えること，図書館という社会活動がヒトとモノと情報のさまざまな「移動」と「不動」によって常にかたちづくられていることを意識することで，図書館情報学や司書養成課程で扱われる概念を再解釈する契機が生まれることはないだろうか．

そのような概念の具体的な例のひとつに「情報リテラシー」（あるいは日本国内では「図書館利用能力」）がある．現代社会で情報の利用者が情報リテラシーを持つことが望ましいという主張は，モビリティーズ・パラダイムを適用すると，距離の隔たりを越えて組織されている社会の中で情報の移動性とヒトの移動性がどのように関わっていくべきかという，移動にまつわる言説のひとつであると考えることもできる．このことは，情報リテラシーが，一般的にそう理解されているような純粋な「人間的」なスキルではないこと，そして，情報リテラシーを「教える」にあたっては，少なくともそれを「動的」に捉える必要があることを示しているように思われる．

注・文献

[1] “司書資格取得のために大学において履修すべき図書館に関する科目の在り方について”．これからの図書館の在り方検討協力者会議．2009-2．https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2009/09/16/1243331_2.pdf,（参照 2024-10-15）．

[2] アーリ，ジョン．モビリティーズ：移動の社会学．吉原直樹，伊藤嘉高訳．作品社，2015，493p.

[3] 馬場俊明編著．図書館情報資源概論．日本図書館協会，2022，270p.

[4] 山本順一編著．情報の特性と利用：図書館情報資源概論．創成社，2012，213p.

[5] 宮沢厚雄．図書館情報資源概論．理想社，2018，285p.